日本災害看護学会先遣隊令和元年台風第 19 号活動報告
活動期日：2019 年 10 月 17 日(木)
活動地域：千葉県市原市　竜巻被害と台風第 19 号被災地
活動者：先遣隊　山﨑　達枝、趙　由紀美、中島　麻紀
活動目的：
１）10 月 12 日発生した大型台風第 19 号の被災状況を把握する。
２）僅かの 1 ヶ月間に(9 月 9 日令和元年台風第 15 号)2 度の大きな災害に遭遇した、被災者の衛生状態と心身の健康状態、および支援ニーズを把握する。
３）上記１）・２）から必要とされる支援を考え、支援につなげる
活動の実際：
　局地的に大きな被害を受けたが、TV ニュースや紙面からも取り上げられることもない被災者のニーズまた心理状態を思い訪問することとした。
9:45　【市原市役所災害復旧対策本部訪問】
　台風 19 号及び竜巻被害の状況について確認、被災地訪問について了承を得る。人的被害　死者 1 名<1 名>、軽傷 10 名<9 名>、住宅等被害　全壊 12 件<12 件>、半壊 23 件<23 件>、一部損壊 55 件<54 件>、倒木被害　道路（市道 42 件、法定外道路 4 件、県道 3 件）、<>内は竜巻による被害、避難所はすべて閉鎖している。
10:20 【竜巻被災地　永吉（ながよし）・下野地区訪問】
　竜巻による被害を受けた世帯を訪問した。
　半壊世帯は家族で片づけを行いながら、自宅で寝泊りをして過ごしている。雨漏りの無いスペースに寝ているが布団が濡れて使用できない。竜巻発生時の恐怖が思い出され、音に敏感になっており、今後もトラウマが続くのではないかと心配している。また空き巣被害もあり、対策として電気を付けたままでの就寝となっているため、熟睡が出来ていない状況である。親戚が手伝いに来てくれているが、他の被災地の報道が多く、市原市の竜巻被害については軽くみられていると感じている。今は家の片付け等やるべきことも多く、気が張っている状況であるが、今後落ち着いた頃に、心労を感じ出すのではないかとのことであった。また、どことなく体調が思わしくないと高齢の女性が語った。
　全壊した自宅の様子を見に来ている方や自宅の片付けに来ている方がいる状況であった。親戚の家に避難している方が多く、今後住む家を探さなければいけない等、先の見通しが立て難い状況であった。家を前にして「思い出の多い家だった」と電話で話されていた。
　慢性疾患治療中の方は、親戚宅に避難中には食事等の管理が難しく、病気の悪化を懸念されていた。
　店舗が被害を受けた方は、自宅は無事だが、生活の糧を失った状況であり、店舗のため公的な支援を受けづらいとのことで、自分たちの力で立て直すしかない状況であるとのことであった。また、全壊した店舗は翌日友人らによって壁や柱などを粉砕され、早期に搬出ができるよう準備された状態であった。一方、ときにはその状況をゴミ置き場だと勘違いされてしまうと、連日の片付けで疲労しながらも、店を必ず再建すると話された。当学会に対しては現状を発信してほしいとの希望が寄せられた。
　警察官が巡回をしていた。警察管は「空き巣被害や興味本位で写真を撮る人も多いので、24 時間体制で巡回を続けている」と語った。

被災地域では家の片付けには人手が必要であるが、現在は住民と親戚等で担っている状況である。ボランティアを希望するニーズが高いこと、被災住民が借り上げ住宅などの支援に関する情報を充分に得られていないこと、また精神面のフォローが必要である状況だと対面によって理解できた。

14：20　【市原市役所再訪問】

危機管理課、保健福祉課に現地の状況及び、ボランティアのニーズが高いこと、情報が得られていないことで住民が精神的負担を抱えていることを報告した。市からはボランティアの情報を確認すること、今後保健師が被災地区を訪問する方針であることが我々に伝えられた。

子どもたちのメンタルケアも重要視されており、カウンセリングを行うため、平時よりも学校臨床心理士等の派遣を手厚くしていくとのことであった。

16：00　【市原市社会福祉協議会訪問】

ボランティアのニーズが高いことを社会福祉協議会（以下、社協）に報告した。社協からは、本日社協職員が被災地内で片付けを続ける住民を巡回訪問し、ニーズ調査とボランティア派遣がなされることの告知を行い、また週末の天候も鑑み、20 日よりボランティアの派遣ができるよう準備をしているとのことであった。さらに店舗の撤去支援に関しては、「自宅の瓦礫除去等が優先され、店舗等の対応は難しい」とのことであった。被災地区の訪問時にボランティア派遣を知らせるチラシ配布を依頼された。

16：30　【竜巻被災地　永吉・下野地区再訪問】

午前中訪問世帯 3 世帯と新たに 4 世帯を訪問した（対面 5 件）。

娘と同敷地内で一人暮らしをしている母親は、台風を懸念して娘宅で一緒にいたため一命をとりとめた。竜巻によって母親宅は 2 秒くらいで潰れ、自宅にいたら家の下敷きになっていただろうと話された。

ボランティアは必要な状況で助けてほしいと強く思っているものの、片付けに追われ受付時間内に電話する余裕が無く、直接来てもらったほうが良いといった意見や、余裕が無いからボランティアは要らないといった意見が聞かれた。家の片付けや目の離せない子どもの世話等、負担を抱えている方がおられた。

課題：

災害によって甚大な被害が各地で相次いでいるなか、報道等で取り上げられにくい地域の住民は疎外感を感じているように見受けられた。広範囲で社会的インパクトの強い内容はマスコミに取り上げられやすいが、一人ひとりには被害の大小はなく、被災者は甚大な被害を受け心身ともに強いストレスを抱えている。今回訪問した住民の方が「おいてけぼりにされた感じ」と表現されたように、不安で過酷な状況が続くなか、孤立感を生まず、また押し付けにもならない支援のあり方を考えていく必要がある。

＜所感＞

市役所の 1 階には被災者相談コーナーが設置されていた。平時では各担当課へ住民が足を運ぶところを、担当者が一旦すべての相談内容を受付け、必要な部署へ連絡・相談・調整するようになっている。コーナーを設置したことで、職員としても横つながりが強化されているように感じているとのことであった。

市の職員自身も台風第 15 号での災害対応に引き続き台風第 19 号の対応も重なり、また平時の業務も並行する必要がある状況のなか尽力されており、十分な休息がとれる状況ではないとのことで、訪問に対し真摯に対応してくれつつも疲労をにじませていた。

被災地域住民の生の声を聞くことができ、それらを市の担当課に伝え、その場で担当者から今後の支援体制や方針などの回答を得、その結果を住民に伝えられたことは、活動の成果につながったと思える。ただ、家族、親戚、友人で小雨の中家の片づけを行っている、疲弊、孤立から攻撃的な方や笑みを浮かべるかたなど精神的な症状が感じられた。1 日も早い支援体制が望まれる。